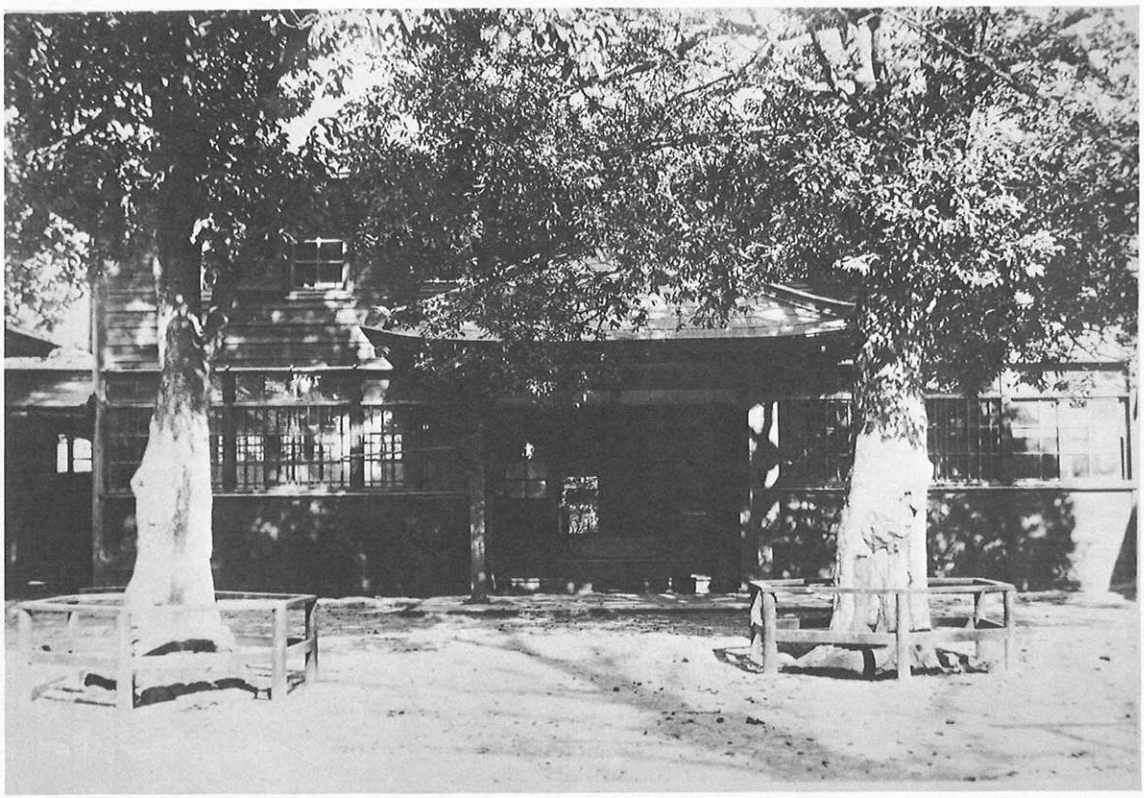
郷土はんのう



昭和初期　埼玉県立飯能高等女学校表玄関

母なる校舎

一対のナンジャモンジャの木の奥の古い二階建。荘重な雰囲気。飯能に生まれ育った人の多くは、この樹を仰ぎながら楽しい時をすごした思い出をもっているにちがいない。ここは、現在の飯能一小校地の東北の一隅。

記録によると、この建物は、明治二十六年第一飯能尋常小学校の校舎の中心部分として建てられた。前方二百米にあった旧校舎（旧聖天小能塾）から移るための、当時とするとモダンな様式であったという。

その後、児童の増加に伴ない西に南に校舎が伸びると共に、大正十一年には実科女学校が入り、昭和六年から私立幼稚園に変わり、戦中の昭和十八年には、軍事教練盛んな青年学校に使われた。

戦後になると、二十一年から町立旧制中学、続いて二十三年には新制中学、二十七年には公民館に衣替えとなり、一部は授産所に使われてきた。そして、四十一年には一小の防音改築に伴ない、老朽建物としてとりこわされ、七十三年の歴史を閉じていった。

いま、往時をしのぶよすがとしては、右側の老木一本が、記念碑一基と共に旧教育時代の象徴のように静かに立っているだけであるが——。

小瀬戸村郷土史考

野口正元

小瀬戸は昔から農耕に適した所ではないが、それでも名栗川河岸段丘の上に、関東ローム層が厚く堆積した場所は所々にあって、特に新寺の原などは、渡場遺跡と向い合って、古代人の住居跡でもありそうな、研究に値する場所である。ここに鎌倉時代末期から、高麗人の流れをくむ人達、加治氏の末流などが少数既に入植して住んでいた。

応仁の乱以前から、吾野に住んでいた岡部六弥太忠澄の後裔は、日影郷（原市場）や小瀬戸にも居宅を持ち、(現在の第二小学校は岡部宅地跡に建てられたものである)鎌倉の在りし日をしのびつつ、質実な生活を送っていた。直竹にも同族の系類が住んでいた模様で、小瀬戸との往来は榎坂を抜けて、名栗川渡場遺跡の下を越すわけだが、岡部一族が相模にいた頃信仰していた瀬戸明神（そこは海の渡しだが渡場という所を船で渡ると、三島大明神を勧請したという瀬戸明神であった)にあやかり郷愁もあって、この地を小さな瀬戸、小瀬戸と呼んだ。(二小付近の地名は小字も小瀬戸である)

東に隣接する久須美は、古くは葛見といい後に北条氏照から宮寺与七郎が与えられて所領した所で、名の示す通りくずまくの生いしげる過疎の地で、小瀬戸も同様な状況だったのである。

寛正三年我野神社が岡部憲澄により造営され、同じ年、小瀬戸の岡部墓地に先祖供養の板碑が造られているが、この頃岡部の同一人物によって新寺の浅間社も勧請されたのではあるまいか、憲澄の曽孫、泰忠は小田原北条に攻められて討死、従って北条は仇敵であるのに、その孫忠吉は北条方に属して戦わねばならない悲運。そうした時代を通して隠忍守り通した岡部であり、小瀬戸であった。居宅のあった裏山（殿山）に砦を作った時もあったろうと思われる。

一方、北条に亡ぼされた三田の武将野口刑部丞は、のがれて中藤川の流れに沿った狭隘の地に落ちついて地名を「野口」とした。野口には耕地はない。山仕事をすると同時に未開墾地の広い原の地に進出して、先住の人達と和をはかり、岡部が勧請した社や寺にも協力して次第に力をつけていったと思われる。

ほどなく北条も敗れる運命となり、その一部が岡部開墾の西に耕地を開き、武士をあきらめ子々孫々まで、この地に住むことを決意し「久留生」と名づけて土着した。須田一族である。

安藤、落合という人達も同じ頃の入植者であろう。杉山、加治、桑田などはそれより古いと思われる。

それぞれの部落で別個に開墾が進捗すると、ほどなく徳川の時代となり、早々と大久保石見守の検地にあい（正式の検地は寛文八年に行なわれた）貢租も決められたが、小瀬戸の岡部が久留生、新寺、野口の貢租取り立ても任されて「小瀬戸の貢租」と称した処から、この地区を総称して小瀬戸というようになり小瀬戸村が誕生した。しかし、成立が寄り集まりであったため精神的より所である社も寺も共通のものを持たず、村民一体としての結束は小さかったと思われる。しかし、一応村としての形態はととのい、岡部を名主格として出発した。忠吉は岩下観音堂を建てて、六弥太の守り本尊と称する観音像を祭っているが、元和三年七十五才で亡くなり、子や孫は徳川に仕えて江戸に出たため、小瀬戸の地は留守居だけとなり、行政的業務は、経過は不明だが野口へと移っていった。名主野口の誕生である。

さて、新寺という地名だが、大字でも小字でもない通称で、市の公図にはのっていない。新編武蔵風土記稿にあるので、徳川の初期火災にあい、原の東部にあった薬浄院が野口東部に再建された際（慶安の頃か）新寺が道上、道下、落合を総称した地名になったものであろう。

浅間社の方は、風土記稿にも村の鎮守薬浄院持ちとなっているが、本尊に仏体の子育観音を入れたのは享保五年、名主野口忠左ェ門で以後子安浅間大士と呼ばれた。まさに神仏混淆である。それを嫌ったのか、それとも入植時代からか、久留生の人達は中藤の白髭神社を明治の初めまで鎮守としていたので、厳密には浅間社、即、村の鎮守ではなかったが、且那寺も新寺と久留生では違っていたので、宗門人別帳を通して名主と寺とが密着した時代でも、やりにくいことが多かったのだろう。享保のなか頃から、名主を「野口」と「久留生」双方から出している。

明治になって、神仏分離令が出た上で村社を置くことになったが、薬浄院持ちの浅間大士では通用せず、本尊の姿は伏せたまま中藤の白髭神社の鈴木宮司を依頼して、村社浅間神社として届出、再出発となり、日清日露の戦後を通じ、武運長久の祈願等に祭政一致の実をあげて、村の鎮守となっていった。

想像にまかせた点もあるが、小瀬戸郷土史を考える礎石となれば幸である。

古道を追って

丸山 清

〝古道〟とは『古代の交通路、もとの道路、旧道』と広辞苑には書かれている。

昔はその道をどこえ行くにも歩くより方法がなかった。必要な荷物は、肩や背に頼り物資や文化は川や谷を渡り、峠や尾根、草深き原野を横切り、悲喜こもごもの中に人々との交流がだんだんと行なわれ、その道筋には自然と今日でいう歴史的遺産が残されてきた。その足跡も車社会の発達とともに「夢とロマン」を残しながら草やぶの中に消えようとしている。いつしか「ふる里のシルクロード」と自ら名付けてルーツを探り、地図にもなき幽幻な昔日の道を追い求めて幾年になろうか。頭から足の先まで泥棒草に埋まり、肌はとげ草にかじられ血がにじむ。踏入実査に先だち可能な限りの事前検討はするが、今日も伝承の史跡は未だ見つからぬ。しかしあきらめず進むうちに〝けもの道〟に引き込まれ動けなくなったことも幾度か。夕日が西山に沈む頃、名もなき峠に立って、コバルト色に輝くふる里の美しさを眺めて、その昔、故郷を後に遠く防人として赴く武蔵武士や旅人達のルーツに浸れるのも古道のもつ一つの魅力であろう。

古道は、山にも畠の中にも街の中にもいたる所にある。紙数に限りもあり細かい考証をつける余裕もないが、何れ機会が与えられるときには、成木川、名栗・入間川の支谷を含め、それに沿って紹介してゆきたい。

今回は、高麗川沿いの一部分を紀行文的に触れてみることとした。それは有名な「鎌倉」という言葉がはっきり出てくる古道である。吾野駅を降りて坂石の宿を東吾野側に戻り、白髭神社の境内を通り、西武線のガードを潜り、元の坂石小学校跡の前へ出て行くコース。しかし、この道はやがて畑道、山道となり、その先肝心な古道へつながりにくくなるが、史跡的の課題は充分残されている。旧坂石小学校の西前の山、三百米位登った付近に平坦な所があり、昔、城、館、砦、いずれかがあったと地元にはいい伝えられており、通り道には「番屋」いわゆる関所の類があったそうだ。最近までそれにまつわる建物があったが、人呼んで「化物屋敷」といわれ、いつしか取りこわしてしまったとのことである。まだまだ解明する価値の充分あるスタート点であろう。別のふたつの取り付け点と考えられるのは、いま少し東へ寄った雑貨屋さんの露路を右へ入るものと、吾野橋の袂際の露路を川沿いに入るものとがある。いずれも高麗川と南側の山波の間の集落「南元組」内で、一つになる古道であり、名付けて「鎌倉古道」として東進する。昔の古道は川沿いにあったが、近年の大洪水で全部けずり落されてしまったと、地元でぼ話してくれた。新旧とりまぜてのすばらしい家並みも終わると思う途端に、山仕事に通う程度の荒れた道になってくる。うす暗い北向きの山の岩陰に食い込むようにして、苔むした小さな祠が忘れられたようにある。言い伝えによると、昔、秩父から鎌倉に向かう武士団がここを通りかかった。その中の偉い家臣が病のためにこの地で亡くなったので、地元にいろいろお願いし、ここへ葬ったとのことである。一説に「岡部氏」に関連があると考えられるが、別の機会にゆずることとし、東へと進もう。やがて古道は、小さな谷を渡り、がれ場の踏跡をへずり、雑草にからまれながら次第に高度を上げてゆく。いつしか高麗川の水の音も遠ざかり尾根の近きを知る。やがて落葉つもる一米巾位の少し手入れされた山道に飛び出す。針葉樹と落葉樹が織りなす出尾根のくびれのようで、その先は降りということがはっきり判る「峠」の感じである。ここが伝承の中にある「鎌倉坂」なのだ。けがれを知らない足元の雪の下の小さな花がみずみずしく美しかった。

ここから大高山への右尾根は篤志家向きだが、途中に名付けて「平野城」跡の言い伝えを調査中だが、解明できたら発表したい。旧東吾野村井上坂組地内へ落葉を踏んで降りると、直ぐ眼下に質素で小さいが、まさに古社の名に恥じない「井上神社」またの名、「高根権現」の社殿が大河ドラマを思わせる環境の中に後姿を見せる。古道は脇をかすめるように降り、沢沿いの林道へ飛び出すが、この井上神社に回り込み、昔日を偲びながら参拝され、一見して自然石の石段を降りて林道で合流されるのも魅力であろう。この部落には、一かたまりとなって、不動堂、石仏、月吉様屋敷がある。集落を抜けると、この古道で忘れてはならない「鎌倉橋」の文字が往時を高麗川の上に語りかけている。

ここまでの距離、行程だけでも整理、解明しなければならない課題が山ほどある。

埋もれたふる里の歴史を抱いた「古道」を追って、我れは明日もまたゆく。

庚申信仰の広がり

岡野達雄

庚申のことが文献に表われるのは、養老八（七二四）年十一月四日「庚申の日、宮中で諸事、長官、秀才、勤公人らを召して宴をたまわり、糸をたまわる。」としたのが最初である。続いて平安時代の僧円仁が入唐した時の記録「入唐求法巡礼行記」の承和五（八三八）年十一月の条に「夜、人は咸く睡らず、本国の正月、庚申の夜と同じきなり。」と記している。この様に、当時の庚申まつりは、貴族社会を中心とする庚申遊的なものであったらしい。それが徐々に宮中や寺社の重要な行事の域を越えて、「庚申さま」として幅広く地域社会の民衆に慕われてくるのは、数多くの庚申縁起がつくられ、これにまつわる禁忌や俗信が広がってゆく、室町から江戸時代にかけてのことである。

ではなぜこの時代に、庚申さまを初めとする民間信仰の高まりがみられるのか考えてみると、その良い例が、室町時代に盛んに造立された、民衆の宗教行事で供養のために建てた、民間信仰板碑と呼ばれるものである。飯能では、東吾野虎秀や赤沢旧勝輪寺の月待供養板碑、そして名栗村上名栗の庚申講板碑が著名である。これには道晋、道鑽などの僧名に加え、孫太郎、六郎二郎などの俗人の名前が刻まれており、以前では結衆何名といった単位でしか登場しなかった民衆が個々に表わされている。民衆が、庚申講などの講や祭礼行事を通じて、寺社と結びついていく様子や、中世的な意味での人と人との結びつきを越えて、村落全体の地縁的なまとまりが一般化しつつあることを、末期の板碑は物語っている。

この傾向は、江戸時代に入り、「農は納」といわれて、村落を一つの納税単位とするに到り、村ごとの意識づけは、さらに明確となっていった。この結果、幕府による天下の再編成は、まず農業生産量の飛躍的増大を生み、社会経済を発展させた。着物が、今までの麻から綿になっていった。食事が二食から三食にかわるなど、人々の暮しぶりが良くなり、ゆとりが生れてきたのである。また、江戸時代には寺社の数が著しく増加して、整理再編が行なわれる過程で、今までの幕府の庇護が受けられなくなってしまった、寺社や修験行者は積極的に民間の信仰生活に関与していった。そこで盛んに民間では庚申講、念仏講、地蔵講などの講が作られ、造塔が行なわれたのである。

飯能市内に現存する庚申塔を調べてみると、六十七基余が記録される（表：1）。数があいまいなのは、山王大権現や馬頭観音と似かよったものや、地元では「庚申さま」と呼んでいるものを含むからである。これを年代順に並べると、三匹の猿が大きく彫られた塔、青面金剛が邪鬼を踏みつけた塔、猿田彦、庚申の文字塔となる。これらの中で、庚申塔にとって不可欠なのが猿の彫りものである。猿は姿や習性が比較的人間に似かよっていて、奇異な行動をすることから、昔の人は、猿を身近な存在として意識し、古くから猿は、山の神、田の神として神聖視されているのである。民俗学では、山の神が春先に山から里に降りてきて田の神となり、収穫祭が済むと山に戻って山の神となるといわれるが、その原形は猿であると説く人もいる。その他、猿の妊娠期間は百五十日～百八十日と短かく、大層安産であることから、産育神としても、また、厩の入口につないで牛馬を守る神獣としてなど、人人は猿に多くの開運授福の力を寄せている。

しかしながら、もとは猿の効能とされていた力も、江戸時代の民間信仰の高まりの中で、庚申さまの力に置き換えられ、猿もいつの間にか庚申さまのお使いにされてしまった。これが庚申縁起では語られぬところではないだろうか。

表：1　飯能の庚申塔

西暦	主尊	所在
一八一六	庚申	南川
一七七六	青面	〃
一七七三	〃	〃
〃	庚申	〃
一八四四	〃	〃
〃	〃	〃
〃	〃	北川
一七七四	青面	〃
〃	〃	〃
〃	〃	〃
一八一四	庚申	〃
〃	〃	南
一八五三	〃	〃
〃	〃	坂石
一八五六	〃	〃
〃	〃	〃
〃	〃	〃
〃	青面	平戸
一八一〇	庚申	飯能
〃	青面（？）	〃
一八四〇	庚申	稲荷町
一七二五	青面	川寺
一八六〇	〃	〃
一七六〇	庚申供養塔	〃
一八五二	庚申	〃
一七九〇	青面	笠縫
一七八〇	〃	〃
〃	不明	〃
一八三三	庚申	〃
〃	不明	〃

故 加藤先生を悼む

新井清寿

六月四日の朝、加藤先生が昨夜なくなられたとの訃報に接した時は、一瞬信じられませんでした。それは五月二十八日に行なわれた郷土史研究会の役員会で、お元気な姿に接したばかりでしたからで、本当に突然のことに驚きました。

先生は私の二年先輩で、学生時代には陸上の選手として活躍され、卒業後は旧制中学校の教師として後進の指導にあたられ後に、迎えられて郷里の南高麗中学校長となられ、続いて豊岡中学校長に転じられて、教育界に大きな足跡を残されました。

教育界に大きく貢献するとともに、体育協会の役員として、県下の体育振興にも大きく貢献しました。退職後は市の文化財保護という大切な職につかれ、飯能の文化財保護のために働きました。

なかでも、仏像の調査では、数か年をかけての悉皆調査を行ない、他市町村ではあまり見られない、「飯能の仏像」二編の出版ができ、出版にあたっては執筆者とともに、先生の努力は忘れることができません。

そのほか、板碑の調査、民家の調査、石灰焼の研究など、数多くの調査研究を進めました。

そして、さらに飯能の歴史をさぐり、文化財の調査研究を進めるために、郷土史研究会を結成して、多くの人達とともに取り組もうと、昭和四十八年に郷土史研究会を結成して、会長におされ、十年間という長い間、会長として、その発展につくされました。

さらに、飯能文化協会の副会長、退職公務員連盟の飯能支部長などのほか、幼稚園長として幼児教育にも尽力されるなど、数々の要職につかれて、その発展につくされた功績は、枚挙にいとまがありません。

こうしたかけがいのない先輩を失ったことは、本当に残念でたまりません。

生前のご功績のほんの一部ですが、思い出すままに記して、先生の追悼とします。

参考資料

中山信守の事

西暦	主尊	所在
一七八二	猿田彦	岩沢
一八三四	青面	落合
一八七九	庚申	前ケ貫
一七九一	〃	矢颪
一七七七	青面	双柳
一七七七	〃	〃
一六八四	青面	〃
一八四七	文字塔	芦刈場
一八四七	庚申塔	赤沢
一七七七	庚申	原市場
一九四〇	〃	下赤工
一八四八	猿田彦	〃
一八三二	青面	南
一八二五	庚申	〃
一七五三	庚申塔	中藤
一七五九	青面	〃
一七四一	〃	〃
一八〇七	〃	上直竹
	〃	〃
	不明	直竹
一七五一	〃	〃
一八〇七	青面	岩渕
	〃（文字）	〃
一六七六	〃	〃
一六八二	山王大権現	〃
一七〇二	文字	上畑
一七二一	青面	下畑
一六八〇	〃	〃
一八〇八	文字	〃
	〃	〃
	庚申	〃

郷土史かるたより

郷土史を親しみやすいものにするため、本会では「郷土史かるた」を作ることになり、「ことば」を会員を中心に、一般からも「ことば」を募集してきましたが、十五人から二〇五句の応募をいただきましたので、役員中詩歌に関係ある十人による審査を行ないました。歴史事象、文化財、民俗の価値、地区別等を考慮に入れ補作も加えて、下記の四十四句の入選作を決定しました。

取り札の画は三枝夢彦氏に、解説は新井清寿氏に執筆を依頼し、十一月頃には発行し、ひろく頒布する予定です。会員のご協力をお願いいたします。

（入選作者）
西村一男、赤田健一、新井雅子、小谷野寛一、新井清寿、双木利夫

（補作者）
井上峰次、坂口和子、島田欽一、町田多加次

い	いかだ宿軒をつらねた川原町	筏宿
ろ	六道をぬけてはるかな大山へ	大山街道
は	八王子の車人形 阿須生まれ	車人形
に	西川材江戸まで五日の筏うた	西川材
ほ	壕（ほり）だけが残る中山館跡	中山館
へ	平安のすがた道して阿弥陀堂	福徳寺
と	多峰主に眠るは領主黒田直邦	黒田直邦
ち	秩父への正丸峠 つづらおり	秩父路
り	竜涯山 いざ鎌倉ののろし台	鎌倉街道
ぬ	塗りあげる直竹石灰江戸の壁	直竹石灰
る	累代の勘解由の墓は 能仁寺	能仁寺
わ	われ岩の渕勝姫のものがたり	勝姫伝説
か	かたくりといかり草咲く岩井堂	かたくり
よ	世直しの旗押し立てた名栗谷	武州一揆
た	高山の不動・軍茶利・大いちょう	高山不動
れ	霊亀二年高麗人が来て上総郷	高麗文化
そ	惣門に雲板ひびく長光寺	長光寺
つ	筒書きにその名たかめた飯能焼	飯能焼
ね	子の権現鉄のわらじと二本杉	子の権現
な	縄市が栄えた飯能大通り	縄市
ら	ラッパ吹きテト馬車が来た谷津の道	テト馬車
む	昔々の住居 わたっぱ芦刈場	古代住居址

う	うまい水世にさきがけた上水道	上水道
の	軒ごとに手織ひびいた絹の町	絹織物
お	大欅神明境内八百年	大欅
く	久留里から殿様はるばる墓参り	久留里藩
や	山あいは水のきれいな和紙の里	紙すき
ま	マンモスの化石出てきた阿須っぱけ	阿須涯
け	渓水の筆塚 建てた筆子たち	筆塚
ふ	ふくよかに琵琶もつ小岩井弁才天（べざいてん）	小岩井弁天
こ	鯉か久保広田うるおす用水池	鯉ケ久保池
え	枝張って茂るタブの木滝の入	タブの木
て	天覧山県の名勝第一号	天覧山
あ	青石の板碑 智観寺・願成寺	青石塔婆
さ	算術と暦法の偉才 千葉歳胤	千葉歳胤
き	汽笛のこして 武蔵野を縫い池袋	武蔵野鉄道
ゆ	夢破れこの地に散った振武軍	飯能戦争
め	明治帝駒を進めた羅漢山	行幸
み	見返りの坂のあたりの飯能笹	飯能笹
し	神仏を合わせ茅の輪の竹の寺	竹寺
ひ	灯をともし仰ぐ観音石の厨子	観音窟
も	餅ついて女のまつり お白講	お白講
せ	浅間塚は鎌倉武士の 供養塚	浅間塚
す	諏訪の森芭蕉の句碑の観音寺	観音寺

郷土出版

○『精明小学校の記録』 島田欽一著 昭和五十七年十月刊

○『民法辻説法』 井口茂著 昭和五十七年十一月 東京法経学院出版刊 一八〇〇円

○『続民俗茶ばなし』（はんのう文庫③） 小谷野寛一著 昭和五十八年三月 飯能郷土史研究会刊 一二〇〇円

○『飯能戦争に散った青春像』 宮崎三代治著 昭和三十八年七月 まつやま書房刊 一三〇〇円

○『搭乗員挽歌』 小沢孝公著 昭和五十八年六月 光人社刊 一二〇〇円

会員アンケート

会員名簿作成を兼ねて、全会員にアンケートをお願いしました。六月末日までの回答分をご紹介します。

① 今度、郷土史研究会に部会を設け、それぞれ希望の分野で活躍していただきます。あなたは何の部会を希望されますか。

② 最近ご研究中のもの、または興味をお持ちのテーマは何ですか。

③ ご意見、ご近況等、八十字以内にお書きください。

野口正元（小瀬戸四一五）
①考古　②小瀬戸のルーツ
③若い頃は郷土史とか古いことには全く関心がなかったので、老人の話など耳になかったが、今となっては書きとめておくのだったとくやまれる。

双木　清（八幡町五ー七）
①文化財　②後北条と関東諸候
③郷土史から遠ざかって早や十年、入会以来名前だけの会員でしたが、サラリーマンにもようやく慣れてきましたので、いま一度勉強したいと思います。

内野博司（下畑三九）
①考古・産業　②江戸から明治にかけての産業の実態
③高校時代に考古学をかじっていました。近年郷土史研究から遠ざかっていましたが、これを機会に研究したいと思います。

森田吾助（飯能五六二）
①文学・産業　②幕末維新期の思想と排仏毀釈運動
③飯能戦争の寺院焼き払いにかかわる当時の思想を知りたく調べています。飯能を焼いた薩摩では特に排仏毀釈が激しかったことなど知ったばかりです。多峰主山の信仰が破壊されたのは明治四年秋と推察しておりますがご存知の方は教えてください。

小谷野寛一（新町一〇ー九）
①民俗②お日待の信仰性の有無
③三ケ月信仰の実態は大体わかったが、「お日待」はわからない。夜を語りつくし飲み明かして新しい日を拝んだ――それがお日待の原型のはずらしいが、それが一例もない。

吉田靖（下加治二二九ー二）
①文化財・考古　②郷土史
③郷土史研究会―なんて魅力的な会名なのだろう。その会に集う人びともまた魅力的に違いない。だからどうしても入会させてほしいのです。先輩のみなさんよろしくご教示を。

町田隆吉（川寺五三九）
①文化財・考古　②特になし
③現在、高校教師として海外帰国子女の教育にあたっております。郷土の歴史に関心をもっておりますものの、何分にも時間がとれず、残念です。

山岸利夫（阿須一〇一）
①民俗
③何ひとつわかりませんので、初歩から教えていただきたいと思っております。

本橋幹治（唐竹五）
②考古・古代史・万葉集など
③加藤先生のご冥福を謹んでお祈りします。

西村一男（下赤工六一四）
①文化財　②中世における当地方の産鉄道跡
③原市場地区内の地名その他から、かつて産鉄集団の存在を信じて数年来、遺跡や伝承を追い求めている。最近中藤の山中から人頭大の鉄滓が出て発奮、諸兄のご教示を仰ぎたい。

織戸市郎（中山六五四）
②飯能の地名
③いまのところ、地名にこだわり、ほかのもろもろの試みすべて、むなしくなり申す。
二足のわらじはけめ悲しさかいかにせん。

赤田健一（山手町三ー一一）
①文学、郷土史料　②飯能戦争
③新しい市民が、この美しい飯能にとけこんでもらうためにも芸術文化に関心ある人々が、気軽に話し合える「場」をつくりたい。

大久保鉄雄（山手町二二ー一五）
②近代・現代の行政
③今年度中に市史行政編を完結する予定です。

丸山　清（川寺二九四ー二）
①古道―故郷のシルクロード
②特にふる里の小武士団の行動と活躍、かくれた城、砦、館跡等の探索・調査。
③車社会の発達とともに、昔人の歩くことによってつくなれた山野の古道が文化遺物とともに草やぶの中に消えようとしている。一古老の伝承を尊重し、今日も道なき山へ踏みこむ。

古沢清三郎（中鹿山五二三）
①文化財　②幕末の文化
③年に一度位は、市内の史跡ツアーまたは文化財めぐり等を講義の後かまたは講師の引率のもとで行ってもらったら、市内在来の人たちも意外な新知見に出会い、認識を新にすることも多かろうと思います。

大野邦弘（南七〇四）
①文化財

小林雅二（中山四九三ー二一）
①文化財
③文化財等の見学会を年一回開催していただきたいと思います。
小生は現在腰痛症のため見学会に当分参加できませんが、要望いたします。

溝口卓男（新町一三ー二〇）
①考古　②特にありません
③この地に参りまして十七年になります。勤めの関係で山口県茨城県と住んできましたが、この地飯能が大変好きです。もっと深く識る機会を与えられ感謝しています。どうぞよろしく。

鈴木　茂（下赤工六八）
①文化財　②地区の古いものの発見発掘など
③原市場郷土史研究会に属して、同志とともに知識の高揚研磨を図り、地区民俗、文化財の発見発掘、保存等に微力をそそいでいます。

浅見徳男（北川四二九）
①産業
③名前だけの役員ということで大変申しわけなく存じます。できれば何かお手伝いをと考えておりましたが、まだできそうもありません。しばらくの間ご容赦くださるよう願い上げます。

加治郷土資料同好会だより

昨年七回行った行事の中からその一部をご紹介します。

(一)　前橋付近の見学会は参加者四三名。群馬県立博物館、次いで観音山古墳、総社神社、上野国分寺跡、山王廃寺、宝塔山、蛇穴山古墳などを廻りました。なかでも国分寺跡の巨大な礎石群に驚き、山王廃寺の塔心礎や根巻石、石製大鴟尾などから古墳期に続く上野地方寺院造建の歴史を多く学びました。

(二)　吾野谷津の文化財めぐりは参加二七名。長念寺、福徳寺、高山不動、法光寺を訪ねました。高山では、軍茶利明王ご尊像を拝む幸運に恵まれ感激しました。また萩、尾花が咲く高原で食べた弁当の味は格別でした。

(三)　恒例の第十回郷土資料展は入場者約五百名。三テーマ中「村のかじや展」が人気をよびました。矢嵐の野鍛冶行木七五三氏の協力で道具や作品多数を展示し、かつて産業発展に寄与してきた業績を再認識しました。

その行木さんが惜しくもこの春急逝されました。心からご冥福をお祈りいたします。(西野)

原市場郷土史研究会だより

会員25名を以って53年11月26日創立総会を開催。事務局を原市場公民館内に置く。以来、定例会を年四回、公民館主催の郷土史講座に協力、地区文化祭に参加、年一回の見学会を開く。

定例会には全会研究課題を挙げ、手始めとして地区内の地名(最小範囲の字名、公称、通称)及び屋(家)号を各会員居住地中心に調査、席上で発表。地名屋号とも、由来や解釈は一答に断定せず、伝承や文献その他を基に複数を挙げたものが多い。長期に亘った調査結果は来春までに冊子にまとめ、一般家庭にも頒布する予定。現在は石仏をテーマとして調査中。主な見学会は青梅資料館、県立資料館、さきたま風土記の丘、平林寺等。文化祭には過去地区内からの出土品。山仕事道具。各家庭に伝わるもので書画、古文書、陶器、ほか珍品逸品。昔の照明器具などを展示。

このほか、一部会員により赤沢から十三世紀の渥美焼壺、縄文土器、須恵器等を発見、市教委への報告及び保存に当るなど。

図書館だより

市立図書館は、創立三十周年を迎えました。十五年ほど前に設立された郷土資料部門は、だんだん充実し、現在約三千五百点、研究者たちの地味な研究資料として、また、高校生たちのレポートの参考書として利用されてきました。今年はまた、飯能初雁会(川高卒業者の会)からの寄附金によって、基本的な歴史資料を購入配架し、蔵書に厚みを加えることができました。その一部を紹介しましょう。

○徳川実紀　全十五巻

徳川幕府の公用日誌五百十六巻をまとめたもの。

○寛政重修諸家譜　全二十六巻

幕府編さんの家系集成で大名・旗本をはじめ諸家の系図を集録したもの。

○寧楽遺文　全三巻

○平安遺文　全十五巻

○鎌倉遺文　全三十巻

奈良、平安、鎌倉の各時代の文書で現在に遺るものを集めた基礎的史料。

○日本城郭大系　全二十巻

○川越文庫　全十巻

○東洋文庫のうち七十冊(赤田)

市史編さんだより

市史編さん事業が始まって十年目をむかえました。市制施行二十周年の記念事業として始められたこの事業も、本会々員の皆様のご協力を得て、すでに資料編六冊と飯能歴史年表の発刊を終えました。

さらに、今年度は資料編のうち近世文書編と行政編(二)を発刊すべく編集が進められております。近世文書編は、江戸時代における飯能地方の農民生活に視点を置いた編集になっており、現代の人々の生活につながる素地を恒間見ることができるでしょう。また、行政編は、先きに発刊された(一)につづくもので、明治になってからの土地制度、土木事業、社会福祉、保健衛生、兵事、警察、消防などの項目でそれぞれ多彩な資料と解説が載せられております。

今年度末までには発刊されますのでご愛読下さい。

なお、既刊のものも残部がありますので、ご希望の方は市史編さん係、市民課窓口、中央公民館へお申し出下さい。一部千円でおわけしております。(浅見)

お知らせ

当会では、昭和五十八年度の会員を募集しております。

会員には、郷土にふさわしい資料を紹介、配布しておりますので是非ご入会下さいますようご案内申し上げます。

入会申し込みは事務局にお申し込み下さい。

▼年会費　千　円

▼事務局

飯能市中央公民館内

〒　二一三六七八へ

編集後記

会員の皆様の歩みに支えられて、飯能郷土史研究会も十年を迎えることができました。

この地にひたひたと押し寄せる都市化の波。そこに根強く生き続けている地方文化の姿を見つけようとする集まり。郷土史を、誰もがみなかった角度から、新しく編み直してみてはどうかと、いつも町並や山河は語っています。

発行所　飯能郷土史研究会
飯能市仲町二八－一
飯能市中央公民館内
印刷所　コバヤシ印刷